

論文要旨

氏名 吳幸芬

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

文焦点と韻律—台湾閩南語を中心として—

論文要旨（別様に記載すること）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

文焦点と韻律—台湾閩南語を中心として—

社会文化科学研究科 人間社会科学専攻

フィールドリサーチ領域

084-G9107 吳幸芬

論文要旨

中国語の標準語形（中国では“普通話”、台湾では“國語”、シンガポールなどでは“華語”と呼称されている。以下、本稿ではこれを「標準中国語」とする）では、情報焦点の表示に、声調の弁別のある音節に加わる語重音が 3 つの種類にそれぞれ異なって実現している、と考えられる。この 3 種類を本研究では、邏輯重音・語法重音・弱化重音と呼ぶ。この 3 種類は感覚的には重音の「強さ」によって弁別されていると考えられるが、物理的にこの「強さ」が何に相当するかは必ずしも定説がない。

先行研究に見られる標準中国語における邏輯重音・語法重音・弱化重音の区別は、台湾閩南語である台語においても観察される。台語の構文構造は、標準中国語とほぼ同様であるが、特有の声調交替があるため、異なる状況による変調現象がみられる。台語で特に考慮しなければならないのは、台語にはいったいどのような声調パターンがありうるのか、ということである。また、台語において変調が生じる現象は、語句の句切り方が「声調グループ」（連読変化の基本単位）の形成と密接に関連して行われるのであるが、イントネーションによる重音付加が、「声調グループ」の句切りに影響するかどうかは、特に、「声調グループ」末尾の「本調」をストレスの一種とみなす考え方もあるので、重音とストレスの関係を考える上でも重要になってくる。こうしたことから、台語の邏輯重音・語法重音・弱化重音が、どのような音声的手段によって実現されているのであろうか、ということをも明らかにしなくてはならない。台語には、日本語にはない焦点表示のマーカ―として、“是 si7”があるが、この“是 si7”も、これらの重音を伴って現われることが多い。この点を中心に、“是 si7”と重音の組み合わせ、あるいは重音のみが対比的焦点を表す場合に、どのような音韻的特徴が関与するかを明らかにするのが本研究の目的である。

本研究の実験方法では、主に、台語の文焦点と音声実現との関わりを、Praat（音声波形、ピッチ曲線、合成などの音声分析を実行できるソフト）による分析を行い、主にピッチ曲線に表れる長さや高さなどの変化を計って比べることにする。

本稿全体の構成は以下のとおりである。

まず、第 1 章では、声調言語としての台語で、（焦点の有無に関わらず一貫して）語の弁別に関わる声調が実現する単位として、語あるいは短い句のピッチを決める「声調グループ」を定義し、声調グループがどのようなピッチで実現するかを実験音声学的な分析によ

って明らかにする。台語の「声調グループ」は、語やフレーズを単位とした文の句切り点によって生じることが知られている。一方、焦点が当たる部分が異なる場合には、「声調グループ」の句切りを変えて、声調もその変化に従って変調をすることが可能である。従って、台語の声調（本調・変調）の決定においては、“変調”と「文の句切り点」が最も重要であると考えられる。これらの声調の弁別が、語、句、節、文などの考えられうる単位から、如何に実現しているか、また、構文において統語論的な結合と「声調グループ」とはいったいどんな関係があるか、どう変化するのか、について詳しく考察を加えた。

第2章では、焦点表示に関わる声調グループのピッチ変化として、3種類の重音を定義し、それぞれが各声調でどのようなピッチ実現形を持つか実験音声学的に分析する。中国語や台語では、音の高低変化が音節そのものの弁別に関与していて、1個以上の音節からなる語や句のまとまりは、変調(tone sandhi)や重音(stress)・軽声(neutral tone)といった形によって表わされる。また、台語では、音節の変調と本調の分布によって定義される「声調グループ」によって、複合語や単純な句(介詞句や動詞句)の境界が表示されることを述べた。これに加えて、文の中での新旧情報の区別によって文焦点が変わる場合に、各状況や情緒の影響を受けて、その音声の強弱、高低、長さなどに変化が見られることを、「イントネーション」の違いとして分析した。また声調の異なる語が同じ文脈に置かれた場合に、情報の焦点や対比の意味に応じてどのように変化するかを観察し、分析することにした。声調に、文強勢表現や軽重音現象が現れることと、語法を弁別し、“邏輯”(「焦点」)を表すため、ある部分が他の部分より際立って強く発音されることがあると考えられる。これはすなわち、声調のイントネーションに、音域を広げることと、音の強さを増す方法を通じて、ある部分を強化できるからである。従って、音域が広がり、音の強さが増すことに伴って、自然に呼応する音の長さも増すと考えられる。実際に、その語法と邏輯の音域と時間の違いを本研究の実験で明らかにしたいと考えた。

本稿では、以下のような3つの項目に分け、音声学的な手法を用いての実験を行った。

実験1. 本調音節の音声実現では；

変調 + 本調

本調 + 軽声

の2タイプの語について、それぞれに邏輯重音・語法重音・弱化重音を伴って現われる環境の、音声データのピッチ変動と長さを分析した。

実験 2. 変調音節の音声実現では；

変調 + 変調 + 本調 (介詞+複合語)

の 1 タイプの語について、持続時間 (総時間数) と、それぞれに邏輯重音・語法重音・弱
化重音を伴って現われる環境の音声データのピッチ変動と長さを分析した。特に、ここ
では、邏輯重音が置かれる場所の違いによる変調音声の音声実現を比較した。

実験 3. 談話の音声的实现の分析と韻律表示例では；

実験 1. と実験 2. では、筆者が各音声環境を設定し、自ら音声データを取って分析した
ものであったが、実験 3. では、筆者以外の話者と会話を交わしながら、お互いに新旧情報
の交換による音声データを取ったものである。それらの音声的实现が邏輯重音・語法重音・
弱化重音をどう伴って現われたか、を分析した。

以上の実験より、次の結果を得た。邏輯重音は、声調グループ内の位置 (本調・変調)
に関わらず、語の冒頭に現われるピッチ変化である。しばしば冒頭に長い声門閉鎖を伴い、
語頭に声調の種類に関わらずピッチ上昇が現われ、全体として長くなる。

語法重音と弱化重音では、邏輯重音のもつ語頭の特徴が現われないような声調グループ
のピッチ実現である。語法重音と比べて、弱化重音ではピッチの変動幅が全体として小さ
くなり、弱化重音のピッチの高さは、先行の語のピッチに左右される。軽声で終わる語は、
語法重音では声調拡散によって軽声を含む音節全体に本調のピッチ変化が実現するのに対
し、弱化重音ではこのような声調拡散が起きないことで区別される場合がある。

このような 3 種類の重音を母語話者が聞き取り区別できることが、自発談話の音声の分
析によって示された。

第 3 章は、台語の“是 si7”の統語論的分析にあたり、繫辞動詞としての用法と焦点構文
の焦点マーカーとしての用法に分類した上で、特に後者を中心に、第 2 章で定義した対比
焦点を示す重音が、どのように現われるかを分析した。台語の“是 si7”は、普通話の“是
shi4”とほぼ同様の働きをする。統語論では常に特殊動詞として扱われ、繫辞(copula)とも
称される。これは主に、日本語の、「A は (が) B だ」、「A は B なのだ」というよう
に、トピックマーカー「は/が」+「だ/である」という断定助動詞で表されているもの
と似ている。繫辞としての用法では、“是 si7”にはじまる声調グループが、焦点に応じて
邏輯重音・語法重音・弱化重音の 3 通りの実現をもつ。

その他に焦点を表す時に、強調する要素の直前に置くマーカーとしての用法もあると考
えられる。情報焦点マーカーとしての“是 si7”は弱化重音で現われないことと、(対比焦
点マーカーとして) 邏輯重音で現われることを示し、構文論上の分類が音韻的实现の違い
にも反映することを明らかにした。

第4章では、台語の“是 si7”の有・無から生ずる焦点と発音の関係 — 対比的焦点について、の考察を行った。

“是 si7”にはじまる声調グループが邏輯重音を伴って対比焦点を示す用法に対応して、“是 si7”を伴わずに邏輯重音のみで対比的焦点を表す方法が複数あり、“是 si7”を用いる場合と用いない場合とで、対比的焦点の範囲が異なることを明らかにする。“是 si7”は対比焦点マーカーとして機能するが、構文論上の位置に制約があるため、より細かい焦点の区別には、邏輯重音と弱化重音が関与すること、後者の置き方が、声調グループの句切りを変える場合があることが示された。弱化重音に先行して介詞や動詞などの一音節語に邏輯重音を置く場合、これらの一音節語の後に声調グループの句切りが現われ、これらの邏輯重音が本調で発音される場合があるが、第2章でみるように、邏輯重音自体は変調のままでも付加されうることから、この場合の句切りは、後続の声調グループが焦点に含まれず弱化重音となることによるものと考えられる。つまり、焦点の表示には、邏輯重音による強調だけではなく、弱化重音による焦点でない部分の明示も重要な働きをもつわけである。

第5章では、本研究の各章で得られた結果をまとめた上、本研究で得られた成果を結論として記述した。台語で文の対比的焦点を表す音韻的な仕組みは、焦点の位置にある語がもつ声調グループの声調の組み合わせに応じた基本的な声調形に対し、さらにピッチ形を変化させる「重音」の配置による。このピッチ形について、第1章で声調グループに応じた実現形をまとめ、さらに、それぞれが各種の重音実現形によってどのように変化するかを第2章でまとめた。第3章と第4章は、この分析に基づいて、それぞれ“是 si7”を用いる対比焦点構文と用いない対比焦点構文の音声的实现を分析したものである。

“是 si7～的 e5”構文では、明示的な焦点マーカーである“是 si7”によって表示されるのは、文中の意味の単なる情報焦点というより、一種の対比焦点表示の構文であることを、明らかにすることができた。

また、構文中“是 si7”を省いても、各語句の音節が音声の強弱変化だけで焦点を表すことができ、強調焦点を表す場合にも、単に、音声の強弱変化による旧・新情報を表すこともできるとみなすことが可能であることが分析された。すなわち、焦点の表示にとって、より本質的なのは、“是 si7”よりも邏輯重音のほうであると考えられるのである。こうして得られた結果については、今後の研究課題として、さらに分析・検証を続けていきたいと考えている。